

元朝における権臣と宣政院

藤 島 建 樹

はじめに

17 (藤島)

一〇世紀ごろから顕著になった外民族の民族意識、国家意識の高揚は遼から金へと引継がれた。それを承けて十二世紀なかばにモンゴル族の建てた元王朝は、それら征服王朝の蓄積した智慧を集大成して中国全土を支配しようとしたのである。その意味からいって元は漢民族にとってもっとも厳しい征服王朝といえよう。いわゆる階級的支配をはじめとして種々の面でそのことは指摘されている。しかし元としても征服王朝のもつ弱点をすべて克服し得たわけではない。ことに、いかなる征服王朝にとっても最大の弱点である部族的体質と定着的支配の矛盾は、元朝にいたって

も容易に解決できる問題ではなく、ついにその苦悩の中で自己崩壊の道をとらねばならなかった。このような悩みの具体的表現の一つに熾烈な派閥抗争がもたらす権臣の跋扈と、あいまいな行政機構の存在を指摘し得る。

本稿では元朝中期、仁宗・英宗時代を通じて権勢をほしいままにしたテムデル（鉄木迭児）と、彼もかわった仏教統領の官署である宣政院に視点をとどめ、元朝の苦悩と限界を考察してみたいと思う。

一

テムデル（鉄木迭児^①）、彼の祖父は憲宗朝に活躍した將軍布林キタイ（不憐吉帶）。叔父クルブハ（忽魯不花）

は世祖によつてはじめて設置された中書省の丞相に起用されている。モンゴル貴族の世系の中に育った彼が政界に出たのは世祖時代であつた。なお、元史類編 卷一四にみえる彼の伝では「便佞、取容」との一句を挿入し、口さきばかり巧みで、人の氣に入られようとする彼の性格の一端をしのばせている。

彼が役職についたのは成宗時代、同知宣徽院使兼通政院使であつた。ついで武宗即位して宣徽院の長官、宣徽院使に昇任した。宣徽院は主として宮廷内の糧食の調達や燕饗の差配を任務とした。この宮廷内に深く立入る事のできた時代に彼は皇太后の寵遇を得たこと新元史 卷二二四の彼の伝は記している。このことが今後の彼の榮達と保身に大きな意味をもつてくる。

この皇太后とは世祖の孫ダルマバール(順宗)の妃、武宗・仁宗の母、昭獻元聖皇后である。彼女は成宗が世を去ると、わが子武宗を位につけんとして、成宗の子アナンド(阿難答)を擁立する成宗の皇后ブルハン(ト魯罕)一派と争い、それに打ち勝つてのち武・仁・英の三宗の時代を通じて大いに權勢をふるつた女丈夫である。彼女の伝の末尾には、性は聰慧、三朝を歴佐す。……然れども檢飭を事とせず、自ら位を東朝に正し、淫恣ますます甚し。……

：「朝政の濁亂いたらざる所なし。」(「元史」卷二一六)との酷評を得ているが、わが子武宗・仁宗の即位を願う母の情ゆえに、そしてモンゴル朝廷のもつ最大の弱点である激しい派閥抗争ゆえに、さらに加えてその聰明さゆえに、モンゴル女性としてはきわめて異例ではあるが政界の表面に出ざるを得なかつた唯一の女性であるといつてよい。

この蔭の実力者元聖皇太后の信任を得たテムデルは至大元年(一二三〇)に江西行省平章政事、ついで雲南行省左丞相と地方まわりを命ぜられた。しかしこの間二年、彼はもっぱら職務をはなれて、つねに宮中に赴いていたため尚書省の奏により詰問をこうむることになった。だが皇太后の命によつて罪をまぬがれ復職することができたのである。この一件は元史 武宗本紀にも

(至大)三年(一二三〇)十月壬申。雲南省丞相鉄木迭児、擅ら職を離れ都に赴く。旨あつて詰問す。皇太后の旨をもつて貸免し、復職せしむ。(卷二三)

と述べている。これはテムデルが皇太后の力添えによつて危機を脱することができた最初の事件となつたが、これによつて彼と皇太后の結びつきは一層強固のものになったことは想像に難くない。

至大四年(一二三二)正月、武宗が崩じた。その位を継承

するのが弟の仁宗（アユル・バリバトウ）であるが、その即位に先んじて、テムデル伝に

皇太后、興聖宮に在って、すでに旨あり。鉄木迭児を召し中書右丞相となす。
（元史卷二〇五）

と述べる如く、テムデルは皇太后の一存でもって中書右丞相、元朝政界における最高の地位である宰相に拔擢されたのである。仁宗が即位したのはそれより二ヶ月のちであった。部屋住みから皇太子時代を通じて中国的教養を身につけ、政治改革を意図した仁宗にとって、その出鼻をくじく人事であった。元史類編のテムデル伝（卷一四）のこの記事には

帝（仁宗）已を得ずこれを相とす。

との一句が加えられており、仁宗の困惑ぶりがうかがえる。

しかしこのテムデルの起用をまったく皇太后の彼に対する寵遇のみと断ずるには事情はいささか複雑である。

武宗の即位に皇太后とともに活躍し、当時カラコルムに居た武宗を迎える準備を整えたのは弟の仁宗であった。したがって仁宗はその功により武宗即位ののち皇太子となり次の天子たることを約束されたのである。しかし武宗政権が一たび安定するとその側近たちの間では武宗の子カシヨ

ラ（和世球・明宗）を擁立する動きが生じていたこと、かつて拙稿で論じた如くである。^④

武宗が至大四年正月八日崩じたわずか二日あと、あたかもその死を待っていたかの如く、武宗によって設けられた尚書省の廃止と中書省の復活、加えてカシヨラ擁立を進言した丞相脱虎脱、三宝奴らに対し「変乱旧章、流毒百姓」との罪名による追求が始まり、さらに四日をへた十四日には早くも彼らの処刑が行われたのである。^⑤テムデルが丞相に任じられたのはそれが一段落した同月二十五日であった。この電光石火の如き一連の動きは周到に計画されたクーデターの如き感すら抱かしめるものがあり、その意味では武宗の死にも疑念が残る。ことに晩年の武宗は過度の飲酒と荒淫によって政治への意欲を喪失していたことを勘案すれば尚更らであるが、今それらを証する材料はない。ともかくこのテムデルの中書右丞相への起用は武宗歿後の混乱を抑え、仁宗即位のための場を設定すべくなされた皇太后の配慮であったと思われる。やがて三月十八日、仁宗は大明殿で即位した。

こうして仁宗とテムデルの連携によって仁宗時代は進行していった。仁宗が元朝を中国的国家へ脱皮させるべく種々努力したことはすでに紹介されているが、それは朝廷内

の、綱紀振肅、遵法精神の高揚にはじまり、外の諸制度の整備から通貨安定策にまで及び、豊かな知識と適確な政治感覚に支えられたものであった。^⑧

テムデルがこの仁宗をいかに補佐したかは明確ではない。ときには、左右司六部の官で心を尽さないものは黜して叙任しないように、との綱紀肅正に関する発言も見えるが、彼の任用の事情や皇太后との関係から察して、仁宗にとって必ずしも好ましい存在とは考え難い。仁宗即位の一年後の皇慶二年（一二三三）三月彼は病を理由にその職を辞している。^⑨その後一年半テムデルは政治の表面から姿を消したが、延祐元年（一二三四）九月、

己巳、復び鉄木迭児を以て右丞相となす。

（元史卷二五）

とあって、以前の地位に復帰した。この復帰は彼の後任の丞相であった哈散の上奏によっている。テムデル伝に記されたそれによればテムデルが政治に練達した重要な人物であることをことさらに強調している。この哈散はのちテムデル一派の殘党である鉄失と行を共にし、英宗暗殺に加わった人物である。^⑩思うにこの病を理由にした一時の離職は、両者の間に軋轢があったこと、そして仁宗に対するテムデルの抵抗と示威、と見るのは考えすぎであらうか。

ともかくこうして再び枢要の地位に立ったテムデルは、以後かなり積極的な行動を見せる。伝の記載によれば、ことにそれは中書省の権限の確立、綱紀肅正そして経済面などの諸施策において顕著であった。なかでも経済政策では海外貿易の管理強化や江南の田糧の適正化、富家や寺觀の私匿・兼併の禁止など、いずれも国庫の増収をはかるべく考慮されたものであった。成宗から武宗時代、ことに武宗時代の経済政策の失敗を回復すべきものとしてこれらの諸施策自体には非難の余地はない。この時がテムデルの政治家としての手腕がもっとも発揮された時期といえよう。もっとも彼の括田増税があまりにも厳しかったがため、江南に乱が生じその政策を中止せざるを得なかったという。丁度このころ、すなわち延祐二年（一二三三）七月

鉄木迭児に命じ、宣政院の事を総べしめ、中外に詔諭す。……（元史卷二五）

と記すように、彼に宣政院が委ねられている。宣政院の長官である宣政院使の任命には三つのタイプが考え得る。(一)すでに宰相の地位を得ているものが就任する場合。(二)将来を期待される若手の実習の場として。(三)老齢者や、左遷すべき高官を一時配置する場合、である。これらによって宣政院の元朝政界における位置を知ることができるがそ

れはともかくとしてテムデルの場合が(一)に相当することは今さら論ずるまでもない。(一)は、まず宣政院の創設者である桑哥が先例となった。そしてテムデルの後には伯顔・脱脱・搠思監など権臣と称される人々がいづれも宰相となつたのち宣政院使を加えている。いわば権力掌握の完成を意味するものといつていい。テムデルの院使就任もこの頃にすべての権力を集中し得たことを物語つていよう。しかし彼の場合たんに権力を附加したことだけを意味するのでなく、もっと重大な意義をひめていようである。その考察はのちにゆだねよう。

こうして最高の地位と権勢を手中にしたテムデルは次第にその専横さを増していったと思われる。しかしそれは具体的政策の面においてはなかった。おそらくこの期間がもっとも私利私欲に趨つて時でもあらう。伝には

鉄木迭児、既に再び中書に入り、首相に居る。勢を怙んで貪虐、兇穢滋に甚し。

と述べている。これが延祐四年(一二二七)六月、彼が賄賂を受け殺人犯を釈放したことをきっかけに爆発した。

内外監察御史四十余人、鉄木迭児の姦貪にして不法なることを劾す。

(元史卷二六、仁宗記三)

となつて表面化した。その弾劾文はテムデル伝に見える。

それによると

鉄木迭児、桀黠にして貪姦、陰賊險狼なり。上を蒙あまひき下を罔し、政を蠹むしみ民を害す。布くに爪牙を置き、威は朝野を聳す。……

の文にはじまり、つぎに不正な田地の兼併と収賄の事実をあげ、さらに諸子が貴顯の地位に居り家奴が官府を陵虐していることを難じ、今やその富はかつての阿合馬や桑哥らの姦臣をもしのぐものがある。すみやかに彼を車裂斬首して天下に示すべきである。と述べるきわめて激しい一文であつた。監察の官四十余名という多数同調者を得たことを勘案するとテムデルの専横いかに激しいものであつたかは想像に難くない。弾劾文によつて事実を知つた仁宗大いに怒り、ただちに彼を捕えるべく命じたが、彼は皇太后側近の者の家に匿まれ有司も手を下し得なかつたという。

仁宗、樂しまざること数日、また皇太后の意の出ずるを恐誠し、重傷もこれに拂るにえず。乃ち僅にその相位を罷するのみ。

と伝に記すごとく、皇太后の後楯を力に、職務こそ罷免されたが、致命的とも思われたこの危機を免がれ得たのである。しかし皇太后のテムデルに対する庇護はこれに止まることはなかつた。再起不能とすら思われた彼に再び政界へ

の道を開いてやっているのである。

彈劾を受けてより二年を経ない延祐六年（一二一八）四月テムデルはこともあろうに東宮輔導の職、太子太師に任命され世人を驚駭させた。元史の本紀には

鉄木迭児を以て太子太師となす。内外監察御史四十四人その私を違し、政を蠹むを劾し、師保の任に居ること難しとす。聴さず。
（元史卷二六）

とある。さらにその内幕を語って

帝、ついに太后の故をもつて、問うことなし。

（元史類編卷一四）

と述べている。これによって再び皇太后の力によったことが明らかである。

仁宗の政治改革は多面にわたるものであったが、しかしそのいづれに成功し何が効果を表わしたかを明確に指摘することは難かしい。元朝諸帝のなかでもっとも中国的教養に富むといわれた仁宗は、中興の名君となる素質を有しつつ、その改革が中途半端に終わった原因の一つにつねに背後にあって圧力を加えた皇太后の存在と、それと固く結ばれたテムデルの専横があったと思われる。延祐七年正月辛丑（二十一日）仁宗は世を去った。

二

元史、英宗紀（卷二七）延祐七年（一二三〇）正月

庚申、太子太師鉄木迭児、太后の命を以て右丞相となる。

庚辰（二十四日）、仁宗崩じてより三日後にテムデルは再度、宰相の地位に、それも再び太后の命によって帰り咲いた。さきの武宗崩御の際の演出が同じ人物を主演に再演されたのである。ただ以前のテムデルは拔擢され期待された主役であったが、今の彼は識者の顔をしかめさせる悪役であった。あえて彼を起用した皇太后の信頼の厚さを驚嘆するばかりである。

もっともこの時もあえて彼を起用しなければならない事情が存在していた。仁宗を継ぐのは仁宗の嫡子皇太子シデバラ（碩德八剌）であることはすでに決定していたが、彼を皇太子にしたのは太后とテムデルであった。英宗紀には

仁宗、「英宗」を立てて太子となさんと欲す。帝（英宗）入りて太后に謁し、固辞して曰く……。太后許さず。延祐三年十二月丁亥、立てて皇太子となす。

（元史卷二七）

と、文宗紀の記載

延祐三年、丞相鉄木迭児、英宗を立てて皇太子となさんことを議す……。(元史卷三二)

の兩文を見れば明らかである。

さきにふれた如く、武宗即位の際、その後継は弟仁宗に、そのあとを武宗の子カシヨラが継承するとの約束がなされていた。それを実行するならば仁宗の皇太子にはカシヨラが立てられるべきであったが、太后とテムデルはその約束をくつがえしシデバラを選んだのである。

このシデバラが選ばれた事情を皇太后の伝には

太后、明宗の少き時おきなに見えるに英氣あり。英宗やや柔懦なり。諸羣小、以つて明宗を立つれば必ず己に利せずと。遂に英宗を擁立す。(元史卷一六)

とあり、太后がその側近とはかり、将来の利を考え英氣あるカシヨラを却け、御しやすい柔懦なシデバラを擁立したことを知り得る。この立太子に関するカシヨラ追放シデバラ擁立の周到な計画とその実行をテムデルが行っていたこともかつて述べたので今は略する^⑩。なおこの記事は続いて、即位後、英宗に拝賀した太后はその予想に反して毅然たる態度を見せる英宗に接し、恨みをのんで病を生じたと述べ、その目算外であったことを伝えている。このような背景が英宗即位以前にテムデルを強引に宰相の地位にもどさな

ければならなかったのである。

こうして返り咲いたテムデルが、英宗の即位をまたずに手を付けたのはかつて彼を弾劾したものにたちに対する報復であった。それはまず趙世延の逮捕にはじまった。趙世延は仁宗に仕え中書、御史台の官を歴任し絶大な信任を受けていた。それがテムデル一派の忌むところとなり皇太后の旨をもって雲南行省へ左遷されたが、仁宗の特命により再び御史中丞に還り、鉄木迭児弾劾の中心的役割をはたした人物である。京師に連行された彼は太后の命により答刑に処せられることになったが、このとき英宗は、

不可なり。法は天下の公、私に徇いこれを輕んずるは、天下に示すに公を以てするに非らざるなり。

(元史卷二七、英宗紀一)

としてとどめたという。なお、その後も再三テムデル一派は彼の誅殺を謀り、一時は獄に下されたこともあったが、テムデルの私怨であることを見抜いている英宗によって釈放されていること彼の伝(元史卷一八〇)に詳しい。この趙世延は順帝のころまで朝廷にあり、政治・文化の両面に活躍し、功臣と称せられその終りを全うすることができた。

英宗の意外な抵抗によって趙世延追放は不首尾に終わったが、テムデルの報復意志はやまず、ついに犠牲者を生ん

だ。英宗紀、延祐七年（一二三〇）二月戊寅の条には

鉄木迭児、前御史中丞楊朵兒只・中書平章政事蕭拝住、太后の旨に違うをもつて、命を矯めてこれを殺し、その家を籍す。
（元史卷二七）

と記している。楊朵兒只、蕭拝住いずれもさきの弾劾の中心的役割をはたした人物である。この二人にやはりテムデルに殺された賀勝を加えた三者の伝は元史卷一七九にまとめられており、テムデル一派の策謀と、それに最後まで屈しなかった彼らの抵抗ぶりを詳述している。こうした処置に対してもちろん英宗は不満であつた。蕭拝住の伝にはこの決定に対し

帝曰く、人命は至重なり。刑殺輕からず。……二人の罪状はまだ明かならず。まさに太后に白し、これを詳讞せしめ、若し果して冤る無くばこれを誅してもいまだ晩からず。
（元史卷一七九）

と述べて刑の執行を延引させようとしている。また前記英宗紀の記事に続いて、太后側近の失列門が太后の命をもつて朝官の更迭を請うたのに対し、先帝の旧臣が軽々しく行動すべきでない戒め、自分が即位してのち諸臣と協議して定めることだと述べ阻り続けていることなど、テムデルと太后の政敵肅清、権力安定への猛攻に立ち向い懸命に抵

抗する英宗の姿を見ることが出来る。延祐七年三月十一日英宗は大明殿で即位した。しかしこうした英宗の態度を、たんに面惑外れとして座視するわけにはいかないテムデル一派のつぎの行動は当然英宗に焦点があてられることになる。そして英宗廢立の陰謀が進められたのである。元史英宗紀にはこのことを記して同年五月の条に

戊戌、嶺北行省平章政事阿散・中書平章政事黒驪列及御史大夫脱志哈・徽政使失列門ら、故要東謀の妻亦（列）失八と廢立を謀るを告ぐるあり。拝住、状を鞠めんことを請う。帝曰く、彼もし太皇太后を借り詞をなさば奈何せんと。命じて悉くこれを誅し、其家を籍す。
（元史卷二七）

とある。ここに名を見せる阿散はその十日前に嶺北行省に出されたが、それまでは左丞相の地位にあって右丞相のテムデルと氣脈を通じた人物であり、他は太后伝に名を見せる側近たちである。彼らは英宗の廢立を謀ったが、事前に発覚した。しかし帝は事件が太后に連なり、また太后の旨が下ることに配慮し、彼らを鞠問することなく、ただちに誅したこと、蒙古見史記^⑧などの記述を併せると明らかにする。

こうして英宗は彼が起用した拝住らの努力によって危機

を未然にふせぐことができた。最大の黒幕である太后とテムデルを排除することはできなかったが、彼らの手足をもぐことはできた。太后はこの失敗以後、恨みを飲んで病に倒れたし、テムデルの名も政治の表面に現われなくなった。しかし、この二人に対する英宗の態度はつねに丁重であった。太后にはその心を安んぜんとし加号し、テムデルには父祖の碑を賜い、至治元年（一三三二）六月には

乙卯、鉄木迭児をもつて宣政院の事を領せしむ。

（元史卷二七）

として、再び宣政院使の職を加えられている。また息子達も枢密院や御史台の官として榮進している。しかしこれらも祖母として、また先帝の旧臣としての待遇にすぎなかった。さきの事件を契機として太后とテムデルの時代は事実上終わったといえよう。

至治二年（一三三二）八月、テムデルが歿し、後を追うかの如く、一ヶ月を経ずして太后もまた世を去った。

テムデルに対する追求は、彼の死後四ヶ月ののち、息子で宣政院使となっていた八思吉思が冒りに献田を受けた罪に坐し誅せられたのに端を発し、碑を毀ち、官爵の追奪、家質の没収と続いた。しかしテムデルの禍はさらに重大な事件を引起した。一族への追求をおそれたテムデルの義子

鉄失や息子の鎖南らは至治三年八月、大都への旅中にあった英宗を暗殺したのである。英宗この時若冠二十一歳、在位わずか四年、その一生はまさにテムデルによって左右されたといっても過言ではなからう。

以上の如くテムデルの仁宗・英宗時代を通じた官界での歩みをその背景とともに論じてきた。こうした庇護をたのみ、私党を養い、私利を肥し、天子の地位すら左右したテムデルの態度が後世の史書に彼をして姦臣と記させたのであるが、しかしその評価はあくまでも後の、しかも漢人士大夫の評価であったことを忘れてはならない。それは、天子は頂点に位する専制者であり、臣下は忠実にして有能なる官吏であるとする中国近世の概念を基準としたものであった。それからすれば確かにテムデルは姦臣以外の何者でもない。しかし、当時のモンゴル政權にとってその基準自体が明確ではなかった。天子は中国的専制君主であるべきなのか、モンゴルのハーン、貴族の勢力の代表者としてのハーンであってよいのか。臣下は部族や一派の利益代表であるべきなのか、または官僚でなければならぬのか。その答えを得られぬままに苦悩した元朝の姿をそのまま表現したのがテムデルとその周辺であり、権臣・姦臣と称せられる人々の歩んだ道ではなかったであろうか。

三

仁宗・英宗の時代を通じて政界を壟断したテムデルの経歴の中で興味をひくのは宣政院使への就任である。彼は仁宗の延祐二年（一二二五）七月と、英宗の至治元年（一二三二）六月、いずれも中書右丞相の地位に加えて宣政院使を委ねられていることすでに述べた如くである。

仏教統領の官署宣政院が元朝の政治機構の中にあつて、中書・樞密・御史台の中央三衙門のいづれとも独立し、帝師に直結した特異なものであることはすでに明白にされている。④。そのような機関をすでに宰相の地位にあり、事実上の独裁権を手中にしているテムデルがさらに支配下におさめるにはそれだけの理由が存したといえよう。

もっとも宰相の地位にあつて宣政院使を兼ねることはさきにもふれた如く宣政院の創設者ともいえる桑哥にその例を見ることができ。しかし彼の場合はそれ以前にすでに功德司使であり、宣政院の前身である總制院の院使であつて、むしろ仏教関係の官職を足場に昇進してきたし、またかつて述べた如く彼の宣政院設置の意図がチベットに対する行政的支配をも考慮したものであつた。⑤。これらの点ではテムデルの場合とはやや事情を異にしていよう。宣政院は

そのご仏教に関する官署としての色彩を濃くしていったと思われるが、その宣政院の長官をテムデルが兼任したことは、元朝廷の宣政院に対する感覚と評価を示しているといえよう。これを見るための参考として仁宗・英宗時代および昭献元聖太后の仏教に関する態度を概観してみよう。

太后が仏教に対して一方ならぬ関心を蔵していたことは、それが五台山での大普寧寺の建立と、自らの参拝。および尼僧舎監藍への帰依と奉仕に示されており、さらにその影響が娘や孫へと及んだことも以前に論じた通りである。⑥。こうした仏教への信仰を有する太后の寵遇を一身に、しかも変ることなく集め得たテムデルにとって、彼女の関心事をつねにその意志の如く運ぶことが得策であつたにちがいない。おそらく彼の宣政院使時代にその先鞭がつけられたのであろうが、宣政院使への就任理由の一端もそのあたりに存したのではなからうか。

さて仁宗時代、すなわちテムデルが中書右丞相に就任してのち元史に記される仏教に関する記事は、江南での仏経印行の中止、宣政院の違制度僧の禁止、江南行宣政院の廃止にはじまり、白雲宗の有髪の僧の還俗、西番僧の往来制限、總統所・僧録・僧正・都綱など各司の廃止、五台山の行工部の廃止など一連の、ことに仏教側にとって不利な政

策が示されている。しかもこれらはいづれも仁宗即位以前、すなわちテムデルの宰相就任後、二ヶ月の間に打ち出されたものであった。この事実から考えられるのはテムデル自身の仏教に対する関心は極めてうすく、行政を阻害するものとして考えていたということであろう。この仏教にとって不利な傾向は仁宗即位後もほとんど変化は見られない。西番の軍務は枢密院と合議すること、僧人の犯罪は有旨にゆだねることなど宣政院の権限逸脱を戒める記事が目立ち、奉仏的行為は城内でのラマ寺院の建立と、大普慶寺への金銀・田宅の賜与、延慶寺の建立などでありその規模きわめて小さいといつてよく、仏事になされる釈囚も認められないこともあった。しかるにテムデルが宣政院使を兼ねた延祐二年のころから、初期に見られる如き仏教に対する敵しさは緩和されてくる。先に弾圧的であった白雲宗に対してもその宗主沈明仁に榮祿大夫・司空を授けた。また開元寺、華嚴寺、普慶寺などに田地が寄進され、さらに織仏像工匠接調所や五台山靈鷲寺に鉄冶提摩司が設置された。

仏事釈囚の例もふえてくる。「儒術に通達し、釈典を妙悟す。」と評され、みずからも

明心見性は仏教深しとなし、修身治国は儒道切となす。

(元史卷二六、仁宗紀三)

と述べている仁宗は、仏教に対し決して溺れることなく節度ある態度で臨んだと思われ、またテムデルも仏教に深い理解を示す人物ではなかった。その彼が、しかも宰相の地位にある彼が宣政院使となりその意志に有しないような政策を実行しなければならなかったのは、やはり太后に代表される彼の地盤からの要請であり、また彼自身その地位の安定のため、すなわち帝師と直結し、僧俗併用を原則とする宣政院に足場を築くことによって、モンゴル貴族に隠然たる影響力をもつ帝師や西番僧の支持を得ることも可能であり、かつ必要であったのであろう。

権臣と称せられるものが、そして、すでに最高の地位にあるものが、そのうえ仏教に対して好きにつけ悪しきにつけ関心を抱くことのすくないものが、仏教のための宣政院の長官を自らの上に附加してゆく。その一つパターンはテムデルによって始まったといえる。以後、燕鉄木兒・伯顔・脱脫・搠思監らがこの型を踏襲してゆくのである。

英宗の時代になると仁宗の、ことにその初期に見られた仏教に対する統制、禁令的な記事はほとんど見られなくなる。(もっとも民間に流布している白雲・白蓮両宗に対する禁令は行われたがこれは治安維持上の問題であって、英宗自身の仏教に対する態度を表明するものではない)それに反して崇仏的行為が増加してくる。

まず目にとまるのは即位後六ヶ月をへた延祐七年（一二三二〇）九月に始まった寿安山寺の建立^⑤であろう。大都の近郊寿安山（五華山）でのこの造営は、のちに「山を鑿り、兵を損じ、農を傷つけて益なし」との酷評をこうむるが、巨額を支出し、兵卒多数を用いる大事業であった。英宗がこの造寺にいかにか執着したかは、元史英宗紀にはしばしば工事督励に類する記事が見えるし、彼自身も現場におもむいて役人の労をねぎらい、さらにこの建寺を諫めた監察御史らを殺したり貶竄した^⑥ことでも知り得る。さらに英宗は引続いて十一月には各郡へ帝師八思巴殿の建立を命じ、翌年には上都・大都にそれぞれ帝師殿が建立されたという。そのうえ彼は大護国仁王寺へは二度にわたり、またはるか五台山へまでも行幸をはたしている^⑦。そのうえ、修仏事や供養の数も多く、その規模も大きくなっていた。このような英宗の崇仏的態度は彼自身の仏教への傾倒もあるうが、太后とテムデルによって擁立された英宗の満されない一面が仏教への奉仕の面で発揮されたのではなからうか。このような天子のもとにあつて、至治元年（一二三二）六月、テムデルは再度、宣政院使となった。このころ彼はすでに昔日の権勢は失っていたと思われることすでに述べたが、その彼を起用したのは、おそらく先帝の旧臣としての最大の待遇

であつたと思われる。その点政治の第一線にでない宣政院は便利な官署であつた。

老学者のための翰林・集賢院などと同様に政治家の老齢者のためや、一時暫居を命ぜられたもののために宣政院が用いられることの先例となつたのがこのテムデルの二度目の宣政院使就任であらう。もっとも衰えたとはいへ実力者を宣政院使として自らの崇仏行為を円滑に行い、かつ太后の心をも慰めんとした英宗の配慮は当然考え得ることである。

なお、彼の息子八思吉思も宣政院使となつていたが、これは父子の継承はともかく若手の登龍門として宣政院使の地位が用いられた例と見ることが出来る。宣政院は仏教行政を通じて中書省と、西番軍務は樞密院と、さらに僧人訴訟・犯罪は御史台とそれぞれ合議を必要とし、さらにラマ僧やそれを通じてモンゴル貴族や後宮と接することでもでき、有能な若手政治家の行政的手腕と地盤を築くうえでもっとも適した場処でもあつた。このような用いられ方は、これより先に武宗時代の脱虎脱、あとに泰定帝時代の旭邁傑、順帝の汪家奴らに見ることができ、いづれも宣政院使から宰相の地位に昇進している。

このようにして見てくると、宣政院使に就任する三つの

タイプ、繰り返すならば、(一)実力者がさらに権力の拡大と安定をはかって、(二)高級官吏が一時的に配置される。(三)若手行政官が実習の場として。は、テムデルを含めてほぼ彼の時代に出そろうたといえる。このことは同時に宣政院そのものの元朝廷での評価も定着したものと見ることができよう。中枢的行政機構の枠外にあり、しかしそれらに密着したものとして高度な地位が保障され権力闘争の強弱に応じ、また天子を筆頭とする皇族らの仏教に対する関心の高低に応じ、いかようにも変化させて利用できる機構として容認されていたのであろう。改変激しかった元朝統治組織の中で院使の増減は見られても、大きな変革を受けることなくその立場を全うし得たことがそれを証明しているよう。

ラマ教に対する敬意の念と征服王朝のもつ大らかさ、言を換えればあいまいさが生みだしたやはり特異な官署と見ることができよう。

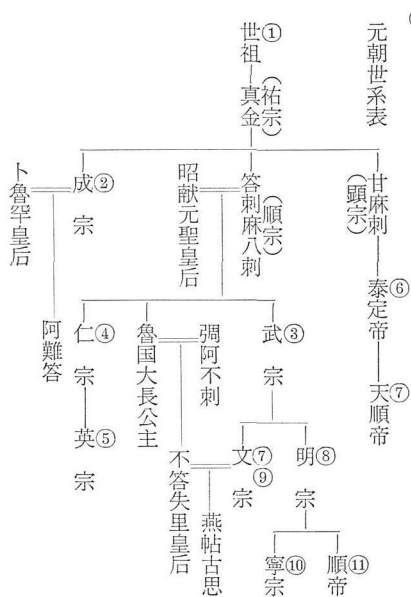
む す び

テムデルと宣政院、論じ来たった如くこの二つは征服王朝元朝のもつ矛盾と苦悩の表面化したものであった。テムデルの場合は、根本には建国当初からの論争点、いわゆる遊牧派・北地派と、定着派・漢地派との対立に由来し、その渦中に生じた一権臣であった。また、宣政院はモンゴル族

が自らの信仰に奉仕するためのものを進行政治的内容の官署として政治機構の中に組み入れたものであり、そのあいまいさゆえにさまざまに利用され政界混乱の一因となった。いわば政治的未熟さを暴露したものといえよう。草原から中国へ移ったモンゴル族はこの直面した矛盾と苦悩を排除し得なかったし、また強いて排除しようとしなかった。この征服王朝特有の奔放さが元朝崩壊を促した一因であり、元朝のもつ限界であったといえるのではなからうか。

註

- ① テムデルの伝は元史卷二〇五(姦臣伝)に見える。
 ② 宣徽院については元史卷八七、(百官志三) 参照。



- ④ (至大四年正月) 丁酉、以雲南行中書左丞相鉄木迭児、為中書右丞相。(元史卷二四)
- ⑤ 拙稿「元の明宗の生涯」(大谷史学第十二号所収)
- ⑥ (至大) 四年春正月庚辰、武宗崩。壬午、罷尚書省。以丞相脱虎脱・三宝奴……交乱旧章、流毒百姓。命中書右丞相塔思不花……等参鞠。丙戌、脱虎脱・三宝奴……伏誅。(元史卷二四、仁宗紀一)
- ⑦ 田村実造著「中国征服王朝の研究」中、二五四頁参照。
- ⑧ (皇慶元年三月) 戊戌、右丞相鉄木迭児言、自今左右司六部官、有不尽心。初則論決、不悛、則黜而不叙。制曰可。(元史卷二四)
- ⑨ (皇慶) 二年、以病罷。(新元史卷二二四、鉄木迭児伝)
- ⑩ 至治三年八月二日、鉄失密遣幹羅思来告曰。我与哈散・也先鉄木児・失秃児謀已定。事成、推立(晋)王為皇帝。(元史卷二九、泰定紀一)
- ⑪ 前掲「元の明帝の生涯」参照。
- ⑫ (延祐七年二月) 甲子、鉄木迭児・阿散請逮捕四川行省平章政事趙世延赴京。参議中書省事乞失監坐繫官。刑部以法當杖。太后命答之。(元史卷二七、英宗紀一)
- ⑬ 遂与平章黑驪母亦烈失八及所幸宣徽使議烈門。外結前左丞相新左遷嶺北行省平章觀望未行之合散等謀廢立。事覺。汗(英宗)慮辭連可敦(皇太后)難治。命丞相拜住掩捕逆党。不鞠而誅之。(蒙兀児史記)
- ⑭ (延祐七年十二月) 乙卯、率百官奉玉冊玉宝。加上太皇太后尊号曰儀天興聖慈仁昭懿寿元德泰寧福慶徽文崇祐太皇太后。(元史卷二七)
- ⑮ (至治元年四月) 戊辰、敕賜鉄木迭児父祖碑。
- ⑯ (至治二年閏五月戊申) 以鉄木迭児子同知枢密院事班丹知枢密院事。(元史卷二八、英宗紀二)
- ⑰ (至治二年八月) 庚寅、鉄木迭児卒。命給直市其葬地。(元史卷二八)
- ⑱ (九月) 丙辰、太皇太后崩。
- ⑲ なお太後の崩御を伝では至治三年二月とするが、本紀や他の史料は至治二年九月とする。今は本紀による。
- ⑳ (至治二年十二月甲戌) 鉄木迭児子宣政院使八思吉思坐受劉襲冒獻田地。伏誅。乃籍其家。(元史卷二八)
- ㉑ (至治三年五月) 戊申、監察御史蓋繼元・宋翼言。鉄木迭児奸險貪汚。請毀所立碑。從之。仍追奪官爵及封贈制書。(元史卷二八)
- ㉒ (至治三年) 八月癸亥。車駕南還、駐蹕南坡。是夕御史大夫鉄失・知枢密院事也失帖木児……鉄木迭児子前治書侍御史鎖南……等謀逆。……殺丞相拜住、遂弑帝於行帳。(元史卷二八)
- ㉓ 野上俊靜「元の宣政院に就いて」(羽田博士頌寿記念「東洋史論叢」所収)を参照
- ㉔ 桑哥に關しては、野上俊靜「桑哥と楊連真伽」(大谷大学研究年報第十一集所収)に詳しい。
- ㉕ 拙稿、元朝「宣政院」考、(大谷学報第四六の四所収)
- ㉖ 拙稿「元朝崇仏の一面」(印度学仏教学研究十一ノ一所収)
- ㉗ 同「元朝后妃の仏教信仰」(同十六ノ二所収)
- ㉘ (至大四年二月) 戊申、罷連江南所印仏經。辛亥……禁宣政院造制度僧。甲寅、……罷江南行通政院行宣政院。甲子、……御史台臣言 白雲宗總攝所統江南為僧之有髮者、不養父

母、避役損民。乞追收所受齋書銀印、勒還民籍。從之。……
丁卯、命西番僧非奉齋書、及無西蕃宣慰司文牒者。勿輒至
京師。仍戒黃河津吏、驗問禁止。羅綏統所及各處僧錄僧正都
綱司。凡僧人訴訟。悉歸有司。(三月丙戌)罷五台行工部。
(元史卷二四、仁宗紀一)

26 (至大四年)六月癸卯、敕宣政院、凡西番軍務必移文樞密院
同議以聞。吐蕃犯永福鎮、敕宣政院與樞密院遣兵討之。

(皇慶元年春正月)癸卯、敕諸僧犯奸盜詐偽圖訟仍令有司專
治之。(元史卷二四)

27 (皇慶二年二月丁亥)功德使亦憐真等以僂事、奏積重囚
不允。(元史卷二四)

28 (延祐二年十月乙未)授白雲宗主沈明仁榮祿大夫司空。
(元史卷二五、仁宗紀二)

29 (延祐三年正月)壬戌、賜上都開元寺江潮田二百頃、華嚴
寺百頃。

(七月)辛酉、賜普慶寺益都田百七十頃。(元史卷二五)

30 (八月)戊戌、置織佛像工匠提調所、秩七品、設官二員。
……(十月)庚寅、敕五台靈鷲寺置鉄冶提學司。

31 燕鉄木兒・伯顔・脱脫(附馬札兒台伝)は元史卷一三八
に、搆思監は元史卷二〇五姦臣伝に伝がある。

32 (延祐七年)九月甲申、建寿安山寺。給鈔千万貫。
(元史卷二七、英宗紀一)

33 (泰定三年十月癸酉)賜大天源延聖寺鈔二万錠、吉安、臨
江二路田千頃。中書省臣言、養給軍民、必籍地利。世祖建大
宣文弘教等寺、賜永業、當時已号虚費。……英宗鑿山開寺、
損兵傷農、而卒無益。……(元史卷三〇、泰定帝紀二)

34 (至治二年九月)辛亥、幸寿安山寺、賜監役官鈔人五千
貫。

(至治元年二月丁巳)監察御史觀音保・鎖咬兒・哈的迷失・
成珪・李謙亨諫造寿安山仏寺。殺觀音保、……杖珪・謙亨、
竄于奴兒干地。

35 (延祐七年十一月)丁酉、詔各郡建帝師八思巴殿、其制視
孔子廟有加。

(至治元年三月)丙子、建帝師八思巴寺於京師。……五月丙
子、毀上都回回寺以其地營帝師殿。

36 (延祐七年十月)乙丑、幸大護國仁王寺。
(元史卷二七)

(至治元年十一月)己亥、幸大護國仁王寺。
(元史卷二七)

(至治二年五月)甲申、車駕幸五台山。……六月丁卯朔、車
駕至五台山。

37 (至治三年)四月壬戌朔、敕天下諸司、命僧誦經十万部。
……己巳、敕都功德使闍兒魯至京師、釈囚大辟三十一人、杖
五十七以上者六十九人、放籠禽十万。令有司償其直。己卯、
敕京師万安・慶寿・聖安・普慶四寺、楊子江金山寺・五台
万聖祐國寺、作水陸仏事七昼夜。